『千葉大学 ユーラシア言語文化論』22（2020）：257-271

ruwe ne の「語り」における機能についての試論

吉川佳見

キーワード：アイヌ語、文末表現、語り、統括、ノダ文

1. はじめに

アイヌ語では、動詞句終わりの節の後に、形式名詞（名詞化辞）ruwe / siri / hawe / humi[1]を置いてこれを名詞化し、その後にコピュラ動詞 ne を置いてコピュラ節にすることがある（田村 1988：76）。これらの構文は、証拠性標示の機能を持つと考えられている。

本稿では、これらのうち ruwe ne を取り上げ、その「語り」の上での機能を考察する。本稿で扱う資料は、アイヌ語沙流方言の資料であるが、先行研究は他方言のものも参照した。例文のグロスは本稿筆者が付した。例文の日本語訳は原典通りとしたが、文脈理解のため、一部、必要に応じてカッコ書きで補足した。アイヌ語例文の下線は筆者が付した。

2. ruwe ne の基本用法と本稿の視点

ruwe ne / siri ne / hawe ne/ humi ne の四構文は、証拠性(evidentiality)標示の機能を持ち、ruwe は確定的な事実としての認識、siri は視覚による認識、hawe は言語情報からの認識、humi は視覚・言葉以外の情報から認識していることを表す。

これらの四形式は証拠性やモダリティの観点から同じレベルで扱われることがしばしばあるが、ruwe ne とそれ以外の形式は、ふたつの点でレベルが異なっている。まず、siri ne / hawe ne/ humi ne が主観的叙述を表すのに対して、ruwe ne は客観的事実を表すという点、そして、口承文芸テキストにおいて、ruwe ne が他の三形式よりも頻繁に出現するという点である。

前者について、ruwe ne の用法についてはこれまでに「「…のである」という程の、ことばの結びの辞で、確定的に言い据えられる。（金田一 1993[1931]：335）」、「文の内容を既定の事実として確説するもの（知里(1974[1936]：154）」、「自分が体験したとか、目撃した、証拠がある等で、確信をもって述べる場合に用いる。昔話や伝説を語るときには、頻繁に用いられる。日常語では、女性より男性の方がこれをよく使う。（田村 1988：76）」、「客観的であることを断定的に表現する。（中川 1995：418）」などの記述がある。ここから、ruwe ne は確定した客観的事実を述べる場合に用いられ、視覚・感覚・伝聞といった主観的事態を述べる他の三形式とは異なることがわかる。

---

[1] 形式名詞 ruwe、siri、hawe、humi は、それぞれ普通名詞 ruwe「～の道、跡」、siri「～の様子」、hawe「～の声」、humi「～の音、感覚」を起源とする。

後者について、田村(1988)が「昔話や伝説を語るときには、頻繁に用いられる（田村 1988：76)」と述べている通り、物語資料では ruwe ne は他の三形式よりも圧倒的頻繁に出現する。このとき、物語資料の siri ne / hawe ne/ humi ne がそれぞれ情報の出処によって使い分けがなされているのに対し、ruwe ne が用いられる箇所では、客観性や体験性、確信性といったものが他の箇所と比較して特別に読み取れるわけではない。

また、「断定」の用法という点からみると、ruwe ne の機能を考える上では、日本語のノダとの対照の問題がある。ruwe / siri / hawe/ humi といった形式名詞＋コピュラ動詞 ne の構文は、形態的に日本語の「形式名詞＋ダ」構文との類似が指摘されることがあるが[2]、中でも ruwe ne はノダとして日本語訳されることがしばしばある。実際に金田一（1993[1931]）は、ruwe ne を「「…のである」という程の、ことばの結びの辞（金田一 1993[1931]：335)」としており、両者に何らかの類似点がある可能性はあるが、これまでに用法の比較対照は行われていない。

そこで本稿では、ruwe ne の機能の一端を探る試みとして、ノダの機能を参照しつつ考察を進める。しかしながら、既存のアイヌ語資料は、大多数が物語資料であり、会話資料は極めて少ないという事情があるため、本稿では文章におけるノダの機能を中心に参照し、その上で、散文説話における ruwe ne のはたらきについて考察する。

3. 文章におけるノダの機能

ノダについて、永野(1986)は、文脈によって「説明・強調・確認・回想・詠嘆・しめくくり」など意味用法が生じること[3]を述べた上で、文章[4]におけるノダの機能を次のように認めている。

> 「のだ」「のである」などの辞をもつ文が、段落の結尾に置かれることによってその段落を統括し、また、文章の最後尾に置かれることによってその文章全体を統括する―これが、一つの典型として認められるのである。
>
> （永野 1986：326）

そして、「統括」について永野(1986)は次のように規定している。

---

[2]「日本語の「のです／のだ」（あるいは「予定だ」「ようだ」「ものだ」「はずだ」など）と非常に似ている（ブガエワ 2014：63)」等の指摘がある。

[3] 永野(1986：253)参照。

[4] 「文章」の定義は多岐にわたるが、たとえば永野(1986)においては、「文章とは、原則として文の連続によって成り立ち、内部において統一した文脈を保ちつつ、全体として完結した言語形式を具え、前後に言語として顕在した他の文脈をもたぬもの（永野 1986：68)」とされている。

「統括」とは、文章を構成する文連続において、一つの文が意味の上で文章全体を締めくくる役割を果たしていることが言語形式の上でも確認される場合、その文の意味以上の特徴をとらえて文章の全体構造における統一性と完結性とを根拠付けようとする文法論的観点である。

（永野 1986：315）

また、奥田(1990)は、ノダに「場面きりかえ的な機能」を認めている。「場面きりかえ的な機能」は「場面とじ的な機能」でもあり「場面おこし的な機能」でもあるという（奥田 1990：208）。こうしたノダにかんする記述の一部を、以下に引用する。

「のだ」を使って強調される出来事は、おそらく、記述の展開過程において、場面のきりかえをもとめる出来事であるだろう。ということは、事件の展開過程にひとつの《くぎり》をあたえて、事件をあたらしい局面に展開させるような、重大な出来事が強調されるということになる。…（中略）…「のだ」をともなう文は、ひとつの段落のなかで、記述の展開過程における《まがりかど》を信号する役めをひきうけている。このような「のだ」をともなう文の機能は、《場面きりかえ的な機能》とよんでおこう。

（奥田 1990：207、一部省略）

宮澤(2011, 2014, 2018)は以上を含めた論考を踏まえ、ノダを「段」[5] の成立にかかわる「統括機能」の観点から分類している[6]。宮澤(2011, 2014, 2018)は、ノダ文に先行文（群）を統括する前方統括機能と後続文（群）を統括する後方統括機能があることを確認し、また、ノダ文が統括される場合（被統括機能）があることを指摘している。前方統括は「換言」「見解」「帰結」、後方統括は「概略」、前方被統括には「補注」「原因・理由」、後方被統括には「前提」の用法がある。宮澤(2011, 2014, 2018)が分析対象としているのは説明文や講義の談話などであり、本稿で分析対象とする口承文芸テキストとは性質が異なるという問題があるが、ここでは統括の方向などの枠ぐみを参考としたい。

---

[5] 談話の「話段」と文章の「文段」の総称であるが、伝達目的や情報内容の違いから生じる、大小様々な話題をまとめる「統括機能」を本質とする言語単位である。「段」は、種々の「言語形態的指標」を伴い、その話題の主な内容を端的に表す「中心文」（「統括文」）と、文章・談話の全体を統括する「主題文」の統括機能が及ぶ範囲に含まれる複数のまとまりを意味する。（佐久間 2010：45-46）

[6] 詳細は宮澤（2018：239）の「図 1」を参照。

以下、紙面の都合上、用法の一部を取り上げて説明する。たとえば前方統括の「換言」は、以下のような例にあらわれる。A22 は、A21 を「つまり」という接続表現を伴い、一般的に換言している。また、A22 のノダが A21 を前方統括していることになる（宮澤 2011：41）。

A21　それは、あのー、どんなトレーニングかというと、ま、たとえば、（2）「朝、寝坊して、（2）朝、遅く起きて、（2）あわててご飯を食べて、ご飯をかき込んで、（2）急いでうちを出て、（2）ダッシュで出発して、電車に飛び乗って、電車に、うーん、すべり込んで、で、なんとか授業に間に合った、セーフだった。」

▼A22　つまり、あのー、述語が出てくるたんびに、そのー、二つ言い換えていくトレーニングなんですね↑。

（宮澤 2011：41）

次は、後方統括の「概略」の例である。C70 で「概略」された内容は、C71～C90 で具体例が示されるため、C70 が C71～C90 を統括している（宮澤 2011：44）

▲ C70　で、この出来事自体も大変興味深いもの、あるいは奇妙である、不思議であることなんですね。

C71　「象の消滅」という短編は、これはあのー、えーと、町で、えー、町はずれに、ぞ、象舎があってですね、そこで象を飼ってたわけですが、その象が、飼育人と一緒に、ある日、突然消えてしまったという話なんですね。

（C71―C89 略：「象の消滅」「嘔吐 1979」「レキシントンの幽霊」の出来事を述べる。）

C90　で、朝になってみると、えー、何の痕跡も無くて、元のままであったっていうのが「レキシントンの幽霊」です。

（宮澤 2011：43）

ノダ文が統括される場合である「被統括」について、たとえば前方被統括の「補注（宮澤 2011 では「見解②」）」は、以下のような例である。ここでは、E235 の「おいどん」という一人称代名詞を例示することが目的であるが、講義者が、ノダを伴った E236 で見解を差し挟むかたちとなっている。したがって、E326 は、E235 に統括される。（宮澤 2011：42）

（E133-E234 略：受講者のリアクションペーパーに書かれた「おれ」「ぼく」「わたし」など、さまざまな一人称代名詞を取り上げ、解説する）

E235　それから、「おいどん」で、「スプラッシュマウンテンのうさぎが使う。」

E236　人間の話をして欲しいんですけどね。

（宮澤 2011：42）

後方被統括の「前提」は、以下のような例にあらわれる。B435～B442 は、すべてノダによって、情報が提示されるが、これらの情報は、B443 の帰結を理解するために必要な前提情報である。したがって、文 B435～B442 は、B443 に統括される（宮澤 2011：44）。

B435　（5）えー、あのね、この、このたび、お札になった樋口一葉さんを主役にしたお芝居書いてるんですけれど、今でもよく上演されてるんですけどね↑、タイトルが『頭痛肩こり樋口一葉』っていうんですよ。

（B346-B439 略：語呂のよさ、樋口一葉と肩こりの関係とポスターの絵柄を説明する。）

B440　（1）こう、肩こり薬で、今、あるのかしら、「トクホンチール」ってのがあったんですね↑、昔、塗り薬。

B441　でー、「頭痛肩こりトクホンチール」っていうコピーが｛笑い｝あったんですね↑、売り文句が。

B442　で、その「トクホンチール」が「樋口一葉」になってるんですね↑。

B443　だから、これが、えーと、さっきのこういう広告コピーのパロディになっている。

（宮澤 2011：44）

4. ruwe ne の出現位置と語りにおける機能

今回は、散文説話の中でも比較的短めで展開が分かりやすい「パナンペ・ペナンペ譚」を取り上げ、ruwe ne の出現位置に何らかの傾向が見いだせるか、また、それがどのように「語り」に関係するかについて考える。パナンペ・ペナンペ譚の主人公はパナンペとペナンペの二人で、基本的にはこのうちの「一方がうまいことをやっていい目を見、もう一方がそれを猿真似して失敗し、ひどい目に遭う

という話（中川 2020：127)」になっている。取り上げるのは、沙流方言で語られた以下の①～⑤のパナンペ・ペナンペ譚 5 話である。

①ETASPE KOMUY（語り手：鳩沢ワテケ）
②トドをだまして肉をとる（語り手：上田トシ）
③ペナンペアン　パナンペアン（語り手：貝澤とぅるしの）
④パナンペ鬼の手から逃れる（語り手：木村キミ）
⑤AKKETEK HOPUNI（語り手：平賀サダモ）

ruwe ne の出現数は、①が 2 回、②が 3 回、③が 4 回、④が 14 回、⑤が 0 回となっている。

まず、①「ETASPE KOMUY」で ruwe ne が用いられている箇所は、中盤でペナンペが登場する直前（例(1)）と、終盤で物語を締めくくる位置（例(2)）である。例(1)では ruwe ne 直後の接続詞 akusu「～すると、～したところ」で場面の切れ目が生じている。ruwe ne の直前までで、パナンペが浜でトドに出会い、トドの肉をたくさん手に入れて裕福になる顛末が語られるのだが、その後、akusu の後でペナンペが登場する場面になる。つまり、ここでは ruwe ne までの内容がいったん区切られ、次の場面に移行するという流れが見られる。こうした ruwe ne には、ノダの前方統括のような性質が見られる。

(1) kamihi a=uni un a=rura a a=rura a hine orano
肉 4.A=家 へ 4.A=~を運ぶ ITR 4.A=~を運ぶ ITR て それから
a=epirka kor an=an ruwe ne akusu oro ta sine an to ta
4.A=~で幸せになる て いる=4.S こと COP すると そこ に ある日
Penanpe san hine ene hawean hi
ペナンペ 下りる て こう 言う こと
（私(＝パナンペ)は）肉を家へ何回にも分けて運んで、
それで裕福になっていきました。そうしていたところ、ある日、
ペナンペが川上の家からやって来て、言いますには
（ETASPE KOMUY pp.66-67）

例(2)は、Penanpe ray wa isam ruwe ne kusu「ペナンペは死んでしまったので」と、ペナンペが死んだという結末を、ここで再度述べており、この物語全体の締め括りとして、前方を統括していると見ることができる。

(2) nea Penanpe a=toykorayke hine tu ray wen ray wa isam.
その ペナンペ 4.A=ひどく殺す て ひどい 死ぬ 悪い 死ぬ て いない
Penanpe ray wa isam ruwe ne kusu tane oka Penanpe
ペナンペ 死ぬ て いない こと COP ので 今 いる ペナンペ
iteki ikoysanpa yak pirka ! sekor an Penanpe uepeker ku=ye
PROH 真似る と 良い と ある ペナンペ 昔話 1SG.A=~を言う
hawe un.
話 FIN
そのペナンペは、ぶっ殺されて、ひどい死に方で死んでしまいました。
ペナンペは死んでしまったのですから、今いるペナンペたちは、
人真似をするんじゃないよ！という、ペナンペの昔話を私はお話ししたのですよ。
（ETASPE KOMUY pp.68-69）

次の②「トドをだまして肉をとる」は、語り手は異なるが話の内容は①と同じものである。②で ruwe ne が出現するのは、前半でパナンペとトドが会話する箇所（例(3)、2 箇所）と、中盤でペナンペが登場する直前（例(4)）である。例(3)は、物語中の発話者がパナンペからトドへと変わる箇所であり、例(4)は、①で ruwe ne が用いられていたのと同様の箇所である。

(3) etaspe herepasi sikiru hi kusu
トド 沖の方へ 向く こと ので
“ hokure arpa oksutu cimesu ” sekor Pananpe hawean ruwe ne akusu
早く 行く 襟首 そがれ と パナンペ 言う こと COP すると
etaspe “ho makanak he ta ne?” sekor etaspe hawean hi kusu
トド はい どう か に COP と トド 言う こと ので
“hokure arpa a=kor etaspe sekor hawean hawe ne wa ”
早く 行く 4.A=~を持つ トド と 言う 話 COP FIN
sekor Pananpe hawean ruwe ne akusu
と パナンペ 言う こと COP すると
“cinu ewen pe un ci ” sekor hawean kor
聞くこと ～しにくい もの FIN と 言う ながら
herepasi i=kesanpa hi kusu

沖へ　　4.O=~を追いかける ことで

トドが沖のほうへ向きを変えたので

「早く行け、襟首そがれ！」とパナンペが言ったところ

トドは「はい？　何て言ったんだい？」と言いました。なので

「早く行きなさい、私のトドさんと言ったんだよ」と言ったところ

「耳が悪いとでも思ったか！」と言って

こちらに向かってパナンペ（＝私）を追いかけて来たので

（トドをだまして肉をとる）

(4)　kamihi a=rura　a=rura　hine ora　a=enispane　kor　an=an

肉　4.A=~を運ぶ　4.A=~を運ぶ　て　それから　4.A=~で長者になる　て　いる=4.S

ruwe　ne　akusu　oro　ta　Penanpe　ek　hine

こと　COP　すると　そこ に　ペナンペ　来る て

（私＝パナンペは）肉を運んで来て長者になりました。(lit. 長者になったのであったところ)

そこにペナンペが来て

（トドをだまして肉をとる）

ここまでの①②の例(1)～(4)を見ると、例(1)(3)(4)に現れる ruwe ne はすべて直後に接続詞 akusu「すると」を伴っている。akusu が用いられると、「帰結として次のようなことが起こったとか、わかったとかいうふうに、次には新情報が示される（田村 1996：7)」。後述の物語④「パナンペ鬼の手から逃れる」も、ruwe ne の出現数 14 回のうち 6 回、後部に akusu を伴っていることから、場面の区切りに ruwe ne が現れる傾向がみられる。

次に、③「ペナンペアン　パナンペアン」では ruwe ne が 4 回出現する。このうち、最初の例(5)は、物語の冒頭、パナンペは獲物が良く獲れるがペナンペは全く獲れないという二人の対照的な状況が語られる部分であるが、場面が転換しているのは下線部（実線）ではなく、その次の波線行の直後である（つまり、「sine an ta　ある日」から場面が切り替わる)。波線部末には「～したが」という意味を表す接続表現「a p」があり、先に挙げた akusu と同様に用いられることがある。この場合、波線以降で場面が転換するため、ruwe ne はその転換よりも弱い転換（ここではペナンペの状況との対照）に関与している可能性がある。

(5)　penanpe　an　pananpe　an　hine siran　hike

ペナンペ　いる パナンペ　いる て　様子　て

pananpe earkinne ison cep nukoan kor an pe ne ruwe ne hike
パナンペ とても 獲物 魚 たくさん獲れる て いる もの COP こと COP て
penanpe anak neun iki yakka omuken patek ki a p
ペナンペ TOP どう する ても 獲物がとれない ばかり する たが
sine an ta ek hine,
ある日 来る て
“a=kor pananpe mak e=iki hine ene nani e=ison pe ...
4.A=~を持つ パナンペ どう 2.S=する て こう すぐ 2.S=狩りがうまい もの
ペナンペとパナンペがいて
パナンペは非常に獲物と魚をたくさんとりながらいるものであって
ペナンペはそうしても獲物をとれないばかりで（lit. ～とれないばかりだったが）
ある日に（ペナンペが）来て、
「私のパナンペよ、お前はどのようにして、すぐにお前は狩りが上手なものなのか？…
（ペナンペアン　パナンペアン p.176）

次の例(6)(7)も前方を統括している。例(6)では、ペナンペからパナンペへと主体が変わり、そしてまたペナンペへと主体が変わるところに ruwe ne が出現する。例(7)は物語の結末部分に相当し、物語を締め括る位置に ruwe ne がある。

(6) okuyma tek kor soyne ruwe ne.
小便する さっと すると 外に出る こと COP
orano pananpe anak emina rusuy
それから パナンペ TOP ～を笑う DESID
“ ene a=ye p ka ehayta hike hnta e=oskoni p an? ”
こう 4.A=~を言う もの も ～に外れる て 何 2.A=~を捕まえる もの ある
sekor hawean kor emina rusuy kor an ruwe ne akusu
と 言う ながら ～を笑う DESID ながら いる こと COP すると
sonnoka konto omuken wa ene iki hi ka isam
本当に 今度 獲物が取れない て どう する こと も 無い
（ペナンペは）小便をさっとひっかけて外にでたのだ。
それからパナンペは笑いたくなって、
「このように私が言うことも無視して何が捕まえられるものか」

といいながら笑いながらいたのだ。すると（lit. 笑いたくていたのであったところ）
本当に（それから）獲物がとれなくてどうすることもできない。

（ペナンペアン　パナンペアン pp.177-178）

(7) pananpe ye p penanpe somo nu wa ora ene iki hi ka
パナンペ ~を言う もの ペナンペ NEG ~を聞く て それから どう する こと も
isam wa kamuy opitta orowa a=wenapapu wa
無い て 神 全て から 4.A=~をひどく咎める て
ene iki hi ka isam kor an ruwe ne
どう する こと も 無い ながら いる こと COP
sekor hunakor a=nu p an
と どこかで 4.A=~を聞く もの ある
パナンペが言うことをペナンペが聞かなくて、どうしようもなくて
神々みんなから、ひどくとがめられて
どうしようもなくていた（lit. どうしようもなくていたのだ）、
と言う話をどこかで私は聞いた。

（ペナンペアン　パナンペアン p.180）

次の④「パナンペ鬼の手から逃れる」では ruwe ne が 14 回出現しているが、このうちの 6 回は後部に akusu を伴うものとなっている。それ以外の例(8)(9)(10)について、まず例(8)は、下線部から小鬼が登場する場面へと移行するため、下線部以降の場面を括る後方統括とみられる。

(8) i=omare hine i=kusa hine hinak ta paye=an akusu
4.O=~を~に入れる て 4.O=~を舟で運ぶ て どこ に 行く=4.A すると
poru an hine poru or ta ahup=an ruwe ne akusu,
洞窟 ある て 洞窟 ところ に 入る=4.S こと COP すると
pon oni an ruwe ne hine “a=kor pon oni ...
小さい 鬼 いる こと COP て 4.A=~を持つ 小さい 鬼
（鬼が）私を乗せて舟で運んでどこやらに行くと、
洞窟があって、その洞窟の中に入っていくと、
小鬼がいた。（lit. 小鬼がいたのであって）
《鬼の台詞》「私の小鬼よ。…

（パナンペ鬼の手から逃れる）

例(9)(10)は、どちらも小鬼が死ぬという展開にかかわる位置に ruwe ne がある。例(9)が主人公の行動を、例(10)がそれを真似する側の行動であり、動作主は異なるが行動内容は同じである。針を小鬼に向けて伸ばす箇所でどちらにも ruwe ne が出現する背景については、小鬼が死ぬという箇所が重要な場面展開になると捉えられている可能性もあるが、推測に留まる。

(9) ane kem hekote a=turi ruwe ne kusu
細い 針 ～の方へ 4.A=~を伸ばす こと COP ので
ray ruwe ne hi kusu
死ぬ こと COP こと ので
ora nea retar katak kunne katak a=uk hine
それから その 白い 糸玉 黒い 糸玉 4.A=~を取る て
（私は）細い針を小鬼に向けて伸ばしたので、
小鬼は死んでしまった。(lit. 死んでしまったので)
そこで（私は）その白い糸玉、黒い糸玉をとって

（パナンペ鬼の手から逃れる）

(10) ne ane kem pon oni hekote turi ruwe ne hine
その 細い 針 小さい 鬼 ～の方へ ～を伸ばす こと COP て
pon oni ray rapokke
小さい 鬼 死ぬ するうちに
その細い針を小鬼に向かって伸ばして、小鬼が死ぬと

（パナンペ鬼の手から逃れる）

この物語④では、登場人物の台詞部分にも ruwe ne が表れている。例(11)はパナンペがペナンペに話している台詞であり、例(12)は小鬼の親鬼の台詞である。例(11)は完結した短い文ではあるが、「tapne kane ne ruwe ne　このようであるのだ」とパナンペがそれまでの出来事を語っていることを考えると、台詞末の ruwe ne は事の次第を統括しているといえるだろう。

(11) "a=kor okkaypo mak ki hine ene nispa ne ru an?"
4.A=~を持つ 若者 どう する て こう 長者 COP こと ある

sekor hawean hi kusu,
と 言う こと ので
"tapne kane ne ruwe ne." sekor hawean=an akus
こうこう COP こと COP と 言う=4.S すると
（ペナンペが）「相棒よ、どうやってこんな長者になったんだ？」と言うので、
「かくかくしかじか」（lit. 「このようであるのだ」）と言うと
（パナンペ鬼の手から逃れる）

一方、例(12)は、台詞の冒頭にある文の末尾に ruwe ne がある。発話の冒頭にあらわれる話題提示のノダについて、宮澤(2018)は、後方統括の「概要」のような話題をまとめあげるような統括力の強いものではないとしているが、例(12)のような場合はどのような位置づけになるのか、今後台詞中の ruwe ne をデータ数を増やし、検討したい。

(12) pon oni an ruwe ne hine "a=kor pon oni,
小さい 鬼 いる こと COP て 4.A=~を持つ 小さい 鬼
upen kam a=pa wa ek=an ruwe ne na.
若い 肉 4.A=~を見つける て 来る=4.S こと COP FIN
hokure pirkano e=ipere wa mimus yakne a=e yak
さあ 良く 2.A=~に食べさせる て 太る すれば 4.A=~を食べる すれば
a=ekironnu kusu ne na. …
4.A=~で満腹になる つもり COP FIN
（パナンペが鬼に連れられて洞窟に入っていくと、）小鬼がいた。
「私の小鬼よ。若い肉を見つけてきたぞ。（lit. 見つけてきたのだぞ）
さあ、よく食事をさせて太ったところで食べれば満腹になるぞ。…
（パナンペ鬼の手から逃れる）

最後に、⑤「AKKETEK HOPUNI」では、①～④と異なり ruwe ne が一度も用いられていない。今回取り上げた 5 話の中でも⑤は短い語りではあるが、④での ruwe ne の出現回数が 14 回と他と比べて著しく多いことを考えると、単純に語りの長さが ruwe ne の使用回数に比例するとは言えない。⑤で、場面の転換は基本的に akusu「すると」や ora(no)「それから」などの接続詞が担っている。その一方で、①～④の物語のいずれも、物語の前後半を分ける箇所（パナンペ主体の話からペナンペ主体の話へと変わる箇所）には ruwe ne が現れていた。物語を語っていく上で、必ずし

も ruwe ne を使用する必要は無いと考えられる一方で、大枠を区切る位置にはどの語り手も ruwe ne を用いるという共通点がみられたのは興味深い点である。

4. おわりに

本稿では、アイヌ語の散文説話中における ruwe ne が、接続詞 akusu との共起率の高さを含め、場面転換の位置に出現する傾向があることなどから、日本語のノダが持つ統括の機能が ruwe ne にも見出される可能性を指摘した。しかし、今回は分析対象とした資料も少なく、文章論についても知見が浅いまま、問題の残る論考となってしまったため、今後詳細な分析を行いたい。

・略号

1/2/4	1/2/4 人称 ※	ITR	反復
=	人称接辞境界	NEG	否定
A	他動詞主語	O	目的語
COP	コピュラ動詞	PROH	禁止
DESID	願望	S	自動詞主語
FIN	終助詞	TOP	主題

※3 人称はゼロ表示。4 人称は、包括的 1 人称複数、2 人称敬称、不定人称、物語中の叙述者の人称等の用法を持つ。

・参考文献

奥田靖雄(1990)「説明（その 1）―のだ，のである，のです―」『ことばの科学 4』, pp.173-216, むぎ書房.

金田一京助（1993 [1931]）「アイヌ語学講義」『金田一京助全集 アイヌ語 I』5, pp.133-366, 三省堂.

佐久間まゆみ編著(2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版.

高橋靖以(2015)「アイヌ語のアスペクトと証拠性」（2015 年 1 月 10 日「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班研究会発表資料）

田村すず子(1988)「アイヌ語」亀井孝，河野六郎，千野栄一編『言語学大辞典』1, pp.6-94, 三省堂.

知里真志保(1974[1936])「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集』4, pp.3-197, 平凡社.

中川裕(1995)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.

中川裕(2020)『改訂版　アイヌの物語世界』平凡社.

永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店.

ブガエワ，アンナ(2014)「北海道南部のアイヌ語」『早稲田大学高等研究所紀要』6, 早稲田大学高等

研究所.
宮澤太聡(2011)「講義の談話の「話段」におけるノダの統括機能と展開的構造」『文体論研究』57, pp.37-51, 日本文体論学会.
宮澤太聡(2014)「接続表現とノダの統括機能に基づく文章・談話の展開的構造―大学学部留学生のための講義の理解と新書の読解―」早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文.
宮澤太聡(2018)「JCK 作文コーパスにおけるノダの統括機能による文脈展開の特徴」『中京大学文学会論叢』4, pp.228-246, 中京大学文学会.

・使用テキスト（【】内は本稿で用いた資料番号。本文中の例文下部の出典表記は、オンラインからの引用の場合はテキスト表題のみを、文献の場合はテキスト表題とページ数を記した。）
アイヌ民族博物館「上田トシさんの民話(7) トドをだまして肉をとる（1996)」（資料番号 C0208 UT_35232AP），アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ. https://ainugo.ainu-museum.or.jp/（2020.9.25 確認）【②】
田村すず子(1985)「ETASPE KOMUY」『アイヌ語音声資料 2 ―ワテケさんの昔話』早稲田大学語学教育研究所, pp.66-69. 【①】
田村すず子(1986)「AKKETEK HOPUNI」『アイヌ語音声資料 3 ―サダモさんの昔話』早稲田大学語学教育研究所, pp.20-21.【⑤】
千葉大学(2015)「ペナンペアン　パナンペアン」『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業　第２年次（北海道沙流郡平取町）　調査研究報告書 1/3』千葉大学.【③】
中川裕、アンナ・ブガエワ、小林美紀、吉川佳見（2016-2020）「パナンペ鬼の手から逃れる」（資料番号 K7708241UP），国立国語研研究所『アイヌ語口承文芸コーパス―音声・グロス付き―』. https://ainucorpus.ninjal.ac.jp（2020.9.25 確認）【④】

（よしかわ　よしみ・千葉大学人文社会科学研究科、国立国語研究所非常勤研究員）

On the Function of "*ruwe ne*" in the Narrative

YOSHIKAWA Yoshimi

Summary :

In this paper, I analyze the function of "*ruwe ne*" in the narrative of Ainu language, referring to the function of Japanese "*noda*". Many studies have proved that "*ruwe ne*" is evidential or modal marker, but little attention has been given to its function in narrtive texts. Although "*ruwe ne*" appears frequently in narrative, the question of whether their precise function is to express evidential meaning has remained unanswered.

It can be observed that, in some materials of the Saru dialect of Ainu language, "*ruwe ne*" frequently co-occurs with the conjunction "*akusu*" and it tends to appear at the changing point of the scene. Hence I suggest that the function of "*ruwe ne*" in the narrative is analogical to the unifying functions of Japanese "*noda*".